

IV - 3

イメージマップを用いた地域の魅力に関する研究

— 秋田県太田町を例として —

秋田大学 学生員 ○小野 和榮
アソシア（株） 正 員 滝口 善博
秋田大学 正 員 木村 一裕
秋田大学 正 員 清水浩志郎

1. はじめに

工業や産業の発展と共に地域格差の是正が行われ、様々な情報が飛び交い、地方独特の習慣や伝統が失われる中で、過疎化・若者の地方離れが見られるなどの地域に対する意識の稀薄さが感じられる。時代の流れの中で人々の意識は多様化してきているが、地域に対する住民の意識はどのように変わってきたのか、また、変わらず共通して意識の中に生き続けるものとは何であるのかを、イメージとして残るもの・イメージマップに描かれているものからとらえ、そこから今後の農村のあり方を推察することを目的とする。

2. 地域イメージの発掘過程

(1) 知られざる農村「太田町」の概要

今回の調査を行った太田町は、人口8,599人、面積103.79km²で農業を主体とした典型的な農村である。その知名度は秋田県内においても決して高いとは言えず、その要因として鉄道や高速道路、国道さえも通っていないということが考えられる。しかし、町の東側に奥羽山脈の一部である真昼山脈が連なり、北と南の隣町との境に大きな川が横たわっていて、自然と気軽にふれあえる要素にあふれている。「花のまちづくり」など農村コミュニティ化も積極的に進めていて、今後伸びていくと思われる町のひとつである。

(2) 調査の概要

本研究では、地域の特色をつかみ、良さを伸ばしていく為に、記述による回答を主体としている。年齢層による比較も行うため、年代のばらつきも考慮した（表-1）。調査項目は、1.現在の町の生活環境がどうであるかについて 2.現在の町のイメージについて（SD法） 3.町の見所について 4.現在も存在し、自分にとって「印象深い」「魅力を感じる」もの（理由も記載） 5.町のイメージマップ作成 となっている。

表-1 回答者の属性

年 代	中学生	20歳代	30歳代	40歳代	50歳～	合 計
人 数	30	8	11	23	16	91

3. SD法による地域意識の比較

表-2に示した因子分析の結果より大人は因子1：開放感、因子2：活力感を表しており、これからどんど

ん新しいものを取り入れていくような「積極性」が感じられる。中学生は因子1：非人工的、因子2：活気のなさを表しており、のどかさを活気のなさにとらえ、「消極的」イメージを抱いていると思われる。

表-2 太田町のイメージ要因の因子負荷量表

(+) ←	→ (-)	中学生		大人	
		因子1	因子2	因子1	因子2
親しみやすい	よそよそしい	0.265	-0.363	0.265	* 0.531
力強い	弱々しい	-0.085	* -0.655	0.291	* 0.595
伸び伸びした	窮屈な	0.324	* -0.817	* 0.539	* 0.569
ほっとする	どきどきする	* 0.748	-0.158	0.509	0.260
静かな	活気のある	* 0.594	0.148	0.189	-0.107
華やかな	さびれた	0.536	-0.278	0.519	0.250
素朴な	洒落た	-0.012	0.114	-0.179	0.007
広々とした	狭い	0.290	-0.553	* 0.533	0.078
浪漫的な	現実的な	* 0.658	0.052	0.166	0.146
自由な雰囲気	封建的	0.455	-0.302	0.251	* 0.569
整然とした	雑然とした	* 0.800	-0.108	0.519	0.076
きれいな	汚れた	0.421	-0.447	* 0.575	0.126
緑の豊かな	緑の少ない	0.148	-0.390	0.509	0.415
歴史的な	現代的な	0.412	0.077	-0.012	0.412
変化のほやい	変化のおそい	-0.216	* -0.687	0.129	0.354
好き	きらい	0.278	* -0.820	* 0.738	0.317
寄与率		34.1%	34.5%	43.7%	31.5%
変動割合		20.2%	20.5%	17.7%	12.8%

4. 年代差による町的环境・見所に対する見方

町的环境について、表-3の15項目について尋ねたところ、ほとんどの項目は年代によらずほぼ同じ比率を表しているが、「公園や広場などのオープンスペース」（図-1）「歴史や文化の伝承」（図-2）は全く逆の比率を表している。これは、次にあげる地域の見所に顕著に表れている。

表-3 生活環境についての質問事項

1. 自然の豊かさ	9. 娯楽的な施設の充実度
2. 水辺を活かした環境	10. 安心して遊べる環境
3. 農村としての美しさ	11. 地域活動の活発さ
4. 街並みのきれいさ	12. 町のにぎわい
5. 花や緑のきれいな街並みとして	13. 観光資源の豊かさ
6. 町の顔となる場所	14. 歴史や文化の伝承
7. 広場や公園などのオープンスペース	15. 住民どうしのつながり
8. ホールや体育館などの公共施設	

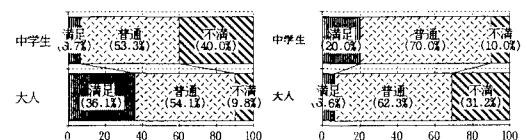


図-1 広場や公園などのオープンスペース

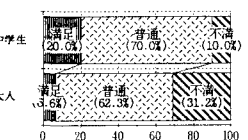


図-2 歴史・文化の伝承

地域の見所としてイメージ再生された要素の総数は、中学生232個、大人562個であった。それらを1)自然的資源、2)公共施設、3)文化・歴史的資源、4)娯楽施設、5)産業資源、6)地域の花壇、7)風景、8)地域・道路に分類してみると図-3のようになる。全体的に同じ構成になっているが、唯一4)娯楽施設について野外と屋内における違いが見られる。野外の娯楽施設を見所として高く評価している大人にとって、公園や広場などのオープンスペースで「不満」の占める割合が高くなっているということは、以前に比べ自然に触れることが少なくなってきたことを示しているといえる。また生活環境において、中学生は文化・歴史にあまり不満がないと答えているにもかかわらず、見所として挙げられていないということはきちんと伝承されていないのではないかとと思われる。

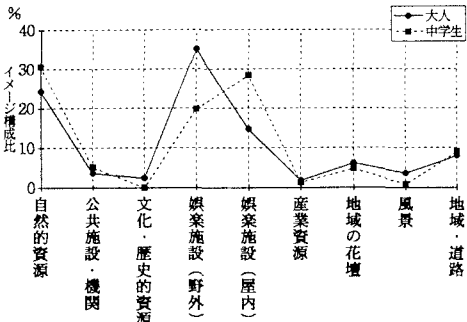


図-3 イメージ分類(見所)

5. 個人財産である町の「印象深いところ」

見所においては年代間における差がそれほど見られなかったものの、印象深いものについては図-4、図-5のように大きな違いが見られる。

中学生においては人工的なものにひかれる傾向があり、分類の項目も少ない。要素としては施設において

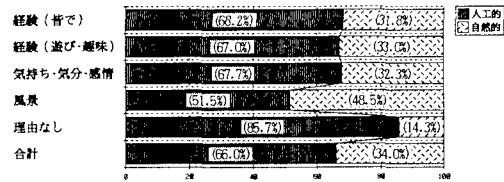


図-4 中学生の印象深いところ

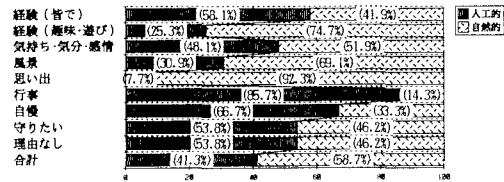


図-5 大人の印象深いところ

(バスケット)や学校(花壇整備)、特に大人にはない記述として商店(買い物)が多く見られた。川での泳ぎや釣りなども比較的多かったが、これは農村ならではの魅力である。

大人は皆で経験することや行事においては人工的な要素の占める割合が大きいが、全体的には自然的要素を含むものが多い。特に「思い出」として印象に残っているものに関してはほとんどがそうである。要素としては、自然の中で得たもの(泳ぎを覚えた)や四季の景観を楽しむもの(早春の田圃の匂い)、趣味(ロッキング、パングライダー)、言い伝え(神社で水を汲むと頭が良くなる)など空間的にも広く、変化に富んだものとなっている。

6. イメージマップにおける特徴

中学生と大人のマップの要素項目について見てみると頻度の高いもの(川、県道、小中学校など)はやはり似ているが、マップとしては全く違う。

中学生においては日常生活に利用する人工的なものがほとんどであり、家・学校・商店の近くでは細かな小路まで書き込んでいるが、遠くにいくほど道が不確かで、とぎれてしまうために続けて地図を書くことができないようである。その理由として、きちんと取り上げられる要素が少なく、目的以外のものに関心が向けられていない。つまり、刺激が少ない、人工的で新しいものに欠ける、それが町全体の印象として消極的なイメージを受けているのであろう。

それが大人では、イラストやコメントを交えて描かれており楽しそうである。これまでにはなかった記載が多く、特に観光用農園や温水プール、農具資料館などが見られる。見所や印象深いところとして出てこなかったということは、プラスのイメージがなく、うまく活用されていないのではないかとと思われる。現在強く印象には残っていないが、いろいろな試みをしていることから、それらを活力感として町のイメージを積極的にとらえているのではないだろうか。

7. 今後の農村整備の方向性

全体を通して自然的要素を好んでいるのが根本にあることは共通しているが、中学生にとっては自然よりも刺激のあるものを求める傾向が強いようである。大人においては、全くの自然に関するものは自分の心の中に残してしまい、大勢での自然との触れ合いを楽しんでいるように思う。しかし、今後は手軽に作り出せない自然というものが、逆に新鮮な魅力として受け入れられていくのではないだろうか。

調査にあたっては、太田町民、太田町役場の皆さまにご協力を頂きました。ここに記して謝意を表します。